

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2172101368		
法人名	社会福祉法人 新生会		
事業所名	サンビレッジ大垣 グループホーム さくら・さくら		
所在地	岐阜県大垣市北方町5丁目35番地		
自己評価作成日	平成29年10月1日	評価結果市町村受理日	平成30年2月2日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kai.gokensaku.nhl.w.go.jp/21/index.php?act=on_kouhyou_detail_2017_022_kani=true&I_gyosyoCd=2172101368-006Pr_efCd=21&Ver_si_onCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 旅人とたいようの会		
所在地	岐阜県大垣市伝馬町110番地		
訪問調査日	平成29年11月29日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

利用者一人ひとりの能力アセスメント(出来る力や分かる力)を行うと共に、日々の生活の中でどのような暮らしを望むのか、そのニーズの把握に努め、日常生活の中で本人の持つ力の発揮が行えるように努めている。
また、グループホーム内での暮らしに留まらず、併設する他サービスとも情報共有しながら、本人が過ごしたい仲間と共に過ごしたい場所で過ごせるように連携を図っている。
可能な限り、家族とも協働しながら、地域の行事に参加したり、馴染みのお店に出掛ける等、地域生活の継続が可能となるように努めている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

利用者の一人ひとりの個性と生活習慣を大切にして、本人の出来る力を発揮できる暮らしの支援をしている。また、職員研修で障がい者体験を行い体感することで人の痛みを理解し、日々のケアを利用者の立場で考えて取り組んでいる。少しでも歩行が可能であれば、利用者の持てる力を奪わないように時間がかかっても車椅子を使用せず職員都合にならないよう心がけている。併設する他の事業所と自由に往来が出来る利用者は、好きなリクリエーションに参加したり、知人や友人に会いに行ったりしている。地域交流も活発で事業所の敷地や建物を開放して、地域住民・ボランティア・家族も一緒に行事を行い交流している。体験学習の児童とのふれあいに感動し、お礼に利用者で作った雑巾を学校に届けるなど地域の中で人々が互いに支え合い共に暮らしていく地域共生社会を目指している。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	部門会議や会議の中で、理念の共有・認識の確認を行っている。理念を基に、利用者の意向を確認しながら支援をしている。生活の幅を広げる為にもインフォーマルを共働している。	自己満足にならないよう、利用者の思いを基に利用者の立場で考え「誰のための支援」「何の為の支援」かを会議などで振り返り実践している。今回の自己評価から地域密着型のサービスの意義の理解をさらに深めることが必要と考えている。	利用者が地域の中でその人らしく暮らしていくためのサービスの意義について、全職員で話し合いサービスの質がさらに向上することを期待したい。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	多種多様なボランティアとの交流、地域の学校へ訪問して体育祭の見学。毎年恒例の地域行事へ参加している。敷地内にあるつつみにて、コーヒーサロンが月2回、開催あり参加。地域への外出や外食も行っている。地域のいきいきサロンにも参加し繋がりが深まってきている。	さくら祭りやバーベキュー・コーヒーサロンに地域住民やボランティアの協力があり一緒に行っている。地域行事やいきいきサロンなどに参加して交流している。健康教室の開催・実習生や体験学習の受け入れなど地域の役割も担っている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	毎月、地域住民向けに健康教室を開催している。また毎月、大垣通信を地域に配信しており、認知症介護や事業所の取組等を報告している。また、教育実習における研修を受け入れ学生啓蒙活動を実践している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に1回、運営推進会議を開催しており、家族、自治会長、協力医療機関、地域包括等からの出席もある。運営状況の報告や、その時の旬の話題を出しながら、サービス向上のための意見を頂いている。いきいきサロンでの様子も運営推進会議で報告している。	現状報告や行事の反省を行い、出席者の意見を次年度に活かしている。地域行事やいきいきサロンの情報を聞いて利用者とは出かけている。会議内容を利用者家族全員に周知が必要との意見から、家族交流会を開催し報告している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市内のGHのケアマネや職員が集まり、事例検討や意見交換を行う「しゃべり場」に参加して、質の向上や取り組みの意見交換をしている。派遣相談員が来苑し、実際の現場を見て意見をもらい、その内容について検討している。	事業所の現状や取り組みを報告し、制度上の解釈を問い合わせている。市主催のグループホームケアマネジャーの集まりに出席して情報交換や事例検討会を行い、サービスの質の向上と協力関係を築くように取り組んでいる。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	マニュアルに沿って、会議等で勉強会を開催したり、現場の中で学び合っている。玄関の鍵は夜間のみで、利用者は自由に出入りが出来る。(土日の職員の少ない時間は利用者の状況により、一時的に施錠する事はある)ベッド柵においてもマニュアルがあり、職員研修の中でも障害者体験を実施し、体感する事で人の『痛み』を理解するよう努めている。	車椅子に乗って利用者の立場になって考えたり、言葉による拘束などの研修を行い、人の痛みを理解して拘束をしないケアを実践している。安易に車椅子を使用することも拘束ととらえ、時間がかかっても歩くことの支援に努めている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	入社段階で研修を受け、会議等で勉強会を実施し確認を行う。ケアの中で身体的虐待、心理的虐待等が起こらないよう、声掛け態度に留意している。気が付いた時にお互いに声を掛け合いながら、虐待防止に努めている。入浴時等に身体の確認も行う。		

グループホーム さくら・さくら

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	外部の研修で学ぶ機会がある。実際に一人が成年後見制度を利用している。『高齢者の尊厳の保持』の視点を大切に研修生の育成を行っている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には家族が、理解・納得が出来るように都度、確認を行いながら説明をしている。サンビレッジの理念や高齢者を抑制しないケアの話からリスクに対する旨の理解を契約時にしている。不安な時はいつでも相談に乗れるような体制をとっている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	外部評価委員会の設置。委員の不定期訪問があり、利用者の思いを聞いてもらえる機会がある。面会時に家族の思い、不安なことや意見等が話しやすいように、関係づくりに努めている。また、フロア内に意見箱の設置をしている。	面会時や家族交流会・イベント時に時間を設け家族の意見を聞いている。職員に言いづらな事は外部評価委員や市の介護相談員に相談できる機会を設けている。居室の掃除の要望には速やかに対応した。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	日常の会話の中や、年度末の自己評価シートを基に面談を行い、意見や提案を聞き業務やケアに反映させている。他部門の上司や仲間にも相談できる環境にあり、相談しやすい相手に話ができるようになっている。	代表者・管理者は日常的に職員と話しやすい関係を築いている。毎月の会議や自己評価シート・個別面談などでも意見や提案を聞いて業務やケアに活かしている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	自己評価シートを年度末に記入し、要望や希望を出すことができる。それらに応じて面談を行い働く条件や希望を整えることができる。永年勤続年数も5年おきに表彰して、本人の喜びや、やりがいに繋げている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	毎月の会議において勉強会を開催している。各種委員会があり誰でも参加が可能である。外部講師を招いての勉強会も多く、市や県からの研修や勉強会の案内も配られ、興味のあるものに積極的に参加している。エルダー制度を導入しOJTの中から育成している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	3ヶ月に1回、市内のGHのケアマネや職員が集まり、情報交換をする機会がある。市内の他GHが開催している勉強会に参加している。他事業所の取り組みや意見を聞く機会となっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所カンファレンスに本人も参加してもらい、職員との顔合わせを行う。入居当初の不安には、時間を十分に取って、ゆっくりと関わっている。本人の言動に気を配り、不安や不便に対応し、希望が話せるような関係作りに心掛けている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ケアマネや他事業所等と連携を密に行う。、まず、家族の思いや不安な部分を聞く事に重心を置きながら、入所の準備を一緒に行っている。話し易い関係を構築し、家族も安心してサービスが利用できるようにサポートしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	併設しているデイ、SSを利用してもらい、他利用者や職員と馴染みの関係を構築し、リロケーションダメージの軽減を図るよう努めている。いつまでも、馴染みの場所で暮らしていく事ができるようにサポートしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	一人ひとりの出来る事や相性をアセスメントして、共同作業を取り入れている。本人の経験を活かした活動を取り入れ、誇りを持って暮らせるように支援している。日々の話題を語り、感情を共有している。人生の先輩として学ぶ事が多く相談にも乗ってもらえる。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族の声、本人の言動と希望を大切にしていきながら関わっている。行事等は家族にも声を掛け、共に過ごせる時間を大切にしている。家族の思いに耳を傾け、本人への理解、認知症への理解をしてもらう事で、共に支え合えるように努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	馴染みの場所、人との繋がりを把握して、生家訪問、姪宅訪問、かかりつけ医、在宅時の暮らしを断ち切らない様に、家族の協力を得ながら支援している。デイや特養の馴染みの利用者との関係が継続できるように支援している。	会話やテレビの映像から思い出話を聞き懐かしい郷土料理を作ることがある。自宅や親戚を訪問したり、併設事業所を利用する友人に会ったりして馴染みの関係が途切れないよう支援している。長年の習慣の継続として阿弥陀仏の前での朝夕の勤行やお参りをしている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	個々の相性や強みの把握をしている。女性同士で性格の相違によりぶつかり合う事もあるが、職員が間に入り橋渡しをする事で程良い距離を取ってもらい、様々な家事作業を助け合いながら行える様に努めている。居室でこもりきりにならない様に声を掛けている。		

グループホーム さくら・さくら

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	他界後、物故者慰霊祭等を通して、その方の人生を共に振り返り、家族の思いを聴く機会を設けている。退居者家族にも、中川さくら祭り等の行事案内等を配布し、関係が切れないように努めており、その後ボランティアで活躍されている家族もみえた。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	一人ひとりが思いを話せるような関係を築き、常に、誰のために、何のためにを考えながら支援している。日常の言動の観察から状態把握、情報共有を行い、ケアプラン立案時に、本人と家族に希望や要望を聞き取り入れている。	「聞いて欲しい、話がしたい」との言葉には離れた場所で個別に聞いている。日頃の会話やふとした言葉から思いを知ることもある。言われない方には、表情や様子から話や問いかけをして思いを把握している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	日々の暮らしの中で折に触れ話題を提供し、話を引き出し、生活歴や生活背景を把握している。面会時に家族からも情報をもらっている。また、馴染みの家具を使用し、本人にとって過ごしやすい環境に近づけるよう、家族と本人と一緒に考えている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	休養と活動のパターンを把握し、その方、本来の暮らし方を損なわないように努めている。その日の暮らし方は、自己選択、自己決定してもらえるように、個別の声掛けをしている。日頃から、“いつもと違う”という変化に気付けるようにしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人の日常の行動と会話、家族の要望を取り入れ、必要に応じ、医師、看護師、作業療法士、言語聴覚士の参加のもと担当者会議を開催し作成している。毎月の会議で各職員間でモニタリングを行い、意見を出し合い多方面で考えられるように努めている。	面会時に家族の要望を聞き、毎月の会議で状況を確認してモニタリングを行い、担当者会議を開催して介護計画を作成している。状態の変化時やモニタリングから目標の追加をして現状に合わせた計画を作成している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	SOAPの実践、ひもときシート、センター方式を随時活用し、状態変化に応じて統一した支援をしている。日常生活での本人の言葉や行動の変化については、考えられる根拠に基づき、プランに活かせるように記録している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	入居者や地域住民、家族等、誰でも参加できる健康教室の開催。また、利用者が行きたいと言われた場所や食べたい物を聞きながら、出掛けたりして対応している。		

グループホーム さくら・さくら

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コーヒースロンやボランティアの訪問、いきいきサロンへの参加で地域住民と関われるよう支援している。地域の小学校、中学校、大学生と交流、他事業所の力士交流会にも参加して、暮らしを楽しむことができるよう支援している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	利用者の希望に添って、3名が在宅時からのDrを利用し、家族と通院して受診を継続している。ターミナル時の往診をかかりつけ医に依頼し看取りを行っている。その都度、本人、家族の意向を確認しながら受診、往診の支援を図っている。	家族の付き添いで従来のかかりつけ医を受診する利用者もいる。利用者の状態は口頭で伝え、突発時は看護師が電話か文書で伝え、いずれも結果報告を受けている。家族が対応できない時は職員が同行している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	些細な変化を伝え、介護職員の不安な事を聞くことができる環境があり、適切な対応ができています。いつもと違うという変化や訴え、日々の状態は朝礼時や随時申し送り、看護師が確認して処置や指示がもらえる。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は本人の情報提供を行い、滞りのない医療が受けられるように対応している。入院中は看護師、介護職員が訪問し、現状の状態把握に努め電話での共有も図っている。早期退院への計画を家族を交え実施している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化や終末期における協議は契約及び入所のオリエンテーション時に話し合いを実施。状態変化の度に、家族の迷いや不安、悩みに対応している。終末期においては医師・看護師・介護職等の各専門職を交えカンファレンスを行い、事前指定書をもとに本人及び家族の思いを確認し合い支援している。	契約時に重度化や終末期の説明を行い、事前指定書で意思の確認をしている。利用者の状態変化の都度家族や医師と話し合い、方針や対応を確認して、情報を共有しながら取り組んでいる。利用者・家族の思いに沿って不安に思う家族に寄り添う支援に努めている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時の対応マニュアルが作成してあり、急変の対応を会議等で確認し合っている。月に1回介護士、看護師が各利用者の緊急時対応マニュアルの確認・見直しを実施。看護師が外部の研修で学んだ事は会議の勉強会にて介護職員に伝えている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に2回、家族、地域、消防署員等と協働して防災訓練を実施している。夜間想定や引きずり搬送等、定期の訓練の実施。その他に、緊急時に対応できるか、一人ずつ動きを確認をし合い、迅速に対応できるように努めている。	夜間想定を含む防災訓練を実施している。今期の訓練は新人及び異動職員の災害時の行動チェックも行った。訓練は地域に連絡し避難者の見守りの協力を依頼している。地域から段差解消のスロープの寄贈があった。	

グループホーム さくら・さくら

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	本人の言葉、生活背景を大切に、それに合った暮らしの援助や声掛けを行っている。関わる時に、挨拶や目線を合わせる、依頼形の言葉使い、声の大きさやトーン等、一人ひとりに合わせた声掛けに気を付けている。	一人ひとりに合わせた声かけや対応に努め、時折立ち止まり振り返りながら自己満足にとどまらないようにしている。身だしなみについても自尊心を損なわないように心がけ対応している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	思いや希望が話せるように、本人に分かり易い言葉で伝えるように心掛け、何気ない言葉も聞き逃さないようにしている。何かを決める時には、選択肢をいくつか設けたり、物を見せたりしながら自己選択、自己決定できるように配慮している。行事の計画も利用者さんの意見を聞き反映させている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	これまでの生活習慣を継続できるように、自由に散歩したり、居室で過ごしたり、参加したいレクがある利用者には継続して参加できるよう声掛けをしている。その日の体調や気分に合わせて暮らせるように支援している。基本的には本人の意見に委ねる。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	外出時には一緒に服を選んで、必要に応じ助言も行っている。洋服や履き物の汚れに配慮し、身だしなみに気を付けている。その人の納得のいく声掛けをすることで、季節に合わない服装をしても本人の尊厳を損なわないように着替えてもらうなどしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	調理の段階から冷蔵庫を見て、一緒に考え調理をしている。食べたい物や作りたい物を聴き、旬の食材を使い、食にまつわる思い出話を楽しんでいる。片付けも利用者同士で行える様に見守りと声掛けを行っている。	皆で冷蔵庫内の食材を確認し、利用者の希望を聞いて朝夕の食事の調理をしている。熱器具は職員が扱い、味見や盛り付け・配膳を職員と利用者が協力し合っている。一緒に食卓を囲んで食事を楽しめるよう支援している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	いつでも水分が摂れるように準備し、水分量が少ない方にはこまめに声を掛けている。家族にも相談をして好みを探り、飲み易いものを持参してもらうなど支援している。夜間には水筒に白湯の提供など本人に応じて対応。いつでも管理栄養士に相談できる体制が整っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	なるべく自立できる様な声掛けをして、磨き残しがある場合は、介入している。義歯洗浄に抵抗のある方でも、信頼関係を構築することで、介入できるように努めた。治療が必要な場合は、家族に申し送り、歯科受診や往診依頼して、改善を目指している。		

グループホーム さくら・さくら

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	本人の排泄間隔や尿量の観察、及び言語的表現が困難な方の排泄のサインを見逃さないようにしている。羞恥心にも配慮し、トイレ誘導の際には声の掛け方や声の大きさに気を付けている。サポートが必要な所を見極め、できる所は本人の力を活かしている。	個々の排泄パターンやその日の体調を把握して、トイレへ誘導している。立ち上がって辺りを見渡す様子を他の利用者が職員に伝えトイレ誘導へ繋げるなど気遣いあう関係がある。昼夜とも全員トイレでの排泄を支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	朝食のフルーツヨーグルト、麦御飯、個別に冷たい牛乳を提供している。食物繊維を含む食品を取り入れたり、バランスにも配慮している。蠕動運動を取り入れる為にもレクや活動、体操には積極的に参加してもらい、移動時は全員が階段を使用している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	基本的に週に2回の入浴。本人の希望に添って入浴し、外出日は別日で対応している。本人の要望があれば入浴は毎日可能である。リスクを伴う為、体制の整った時でない難しい場合を除き、就寝前など希望を聞ける時は対応。入浴時のリスクが高い利用者の場合は安全に入浴ができるように2人体制で行う。	希望すれば毎日の入浴も可能である。家庭の延長として夕食後に入浴対応した事もある。個浴で一人ひとり湯を入れ替え湯温も個々に合わせている。好みのシャンプーを使い、ゆったりと話をしながら入浴を楽しめるよう工夫している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	夜間眠れなかった時や疲労回復等、日中帯にベッドやソファでの休養を取り入れている。ソファの位置を変えるなど、本人の過ごしやすい環境を整えている。就寝前は、個々の時間を過ごすことで、リラックスし安心して眠りにつけるよう支援している。また、週に1回はシーツ交換や布団干しを行い気持ちよく休んで頂けるように努めている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬剤情報を基に把握して支援している。内服や塗り薬等について変更した時は経過観察を行い、看護師からもアドバイスを受けている。薬が変更になった時にはアセスメントを行い、結果は家族や医師に伝え、利用者が心身良好に過ごせるように支援している。服薬チェック表の活用をしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	それぞれの強みを活かして、できる事ややりたい事の支援をしている。飲食店で働いていた方に、食事作りや盛り付け、配膳を行ってもらう事で、得意分野での役割を担うことで、いきいきとした表情が見られる。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	家族と一緒に外出や外食、自宅の行事の参加は家族の協力の基に行っている。行きたい所、行ってみたい所を利用者と一緒に決めていき、家族も巻き込んで計画を立てている。紅葉ドライブ、お千代保福荷散策等を実施している。天気の良い日には近くの喫茶店に行き、社会との繋がりを維持している。	利用者の希望に沿って日用品や食材の買い物・喫茶店に行っている。外食・自宅や親戚宅の訪問などは家族の協力を得て支援している。季節毎の花見やドライブ・参詣などは計画を立てて下見を行い家族も誘って出かけている。	

グループホーム さくら・さくら

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	外出時に財布を持参してもらい、好きな物を購入してもらえるように支援している。自分で好きな物を選ぶ事が難しい方もいますが、選択肢を絞り選んでもらったりしている。自分でお金を払う事は難しくなっているが、欲しい物を決め自分で支払うという行為を継続出来る様サポートしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	年賀状や、その季節に合った題材で絵手紙を描き、家族や友人に出している。遠方の娘さんから定期的に電話があり、取り次いでいる。家族からの誕生日カード、年賀状、母の日の贈り物が届き、家族との繋がりを大切にしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	まずは清潔を第一に考えて環境を整えている。リビングや食卓の採光は、カーテンやダウン灯で対応している。玄関や空間には、季節の花や手作りの掛け物を飾り話題にしながら季節が感じられるようにしている。ベランダにはプランターを置き、水やりをして花や野菜の成長を楽しんでいる。癒しにもなるようなアロマも使用している。	共有空間に季節の花や和の小物・陶器・桜の額や職員・利用者合作の季節の壁掛けを飾り、季節感や家庭的な雰囲気大切にしている。清潔感を保ち窓が広く開放感がある。畳敷きの和室や角地にテーブルと椅子を置き、思いのままに過ごせるようにしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	利用者同士、家族や来客者が、リビングやプライマリー空間、居室、施設内、つつみといった場所ですら自由に気軽に過ごせるように配慮している。プライベート空間を大切に、思い思いの場所で過ごすことができるように、構造上、死角の多い空間を活用している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	在宅生活の継続が出来る様に、家族へ説明し協力のもと、居室には、使い慣れた家具、寝具、思い出の物、畳を敷く等、慣れ親しんだ生活環境が整えられている。環境を整えることで、居心地よく過ごせるように努めている。	入居の準備を家族と一緒に、筆筒や応接セット・鏡台など使い慣れた家具を持参している。家族写真や絵画・趣味の小物や作品を置いて環境が変わらないよう工夫している。畳を敷いて和室希望にも対応している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	手すりは最低限のトイレと階段のみとなっているが、各居室の入り口に飾り棚があったり、キッチンカウンターや棚を利用したり、ソファを置く等、利用者自身の持てる力を奪う事の無いように工夫している。行きたい所に自由に移動することができるようにしている。		